

不適応（不登校）児童生徒の社会的自立を目指した支援の在り方 ～児童生徒の困り感に寄り添うアセスメントの工夫を通して～

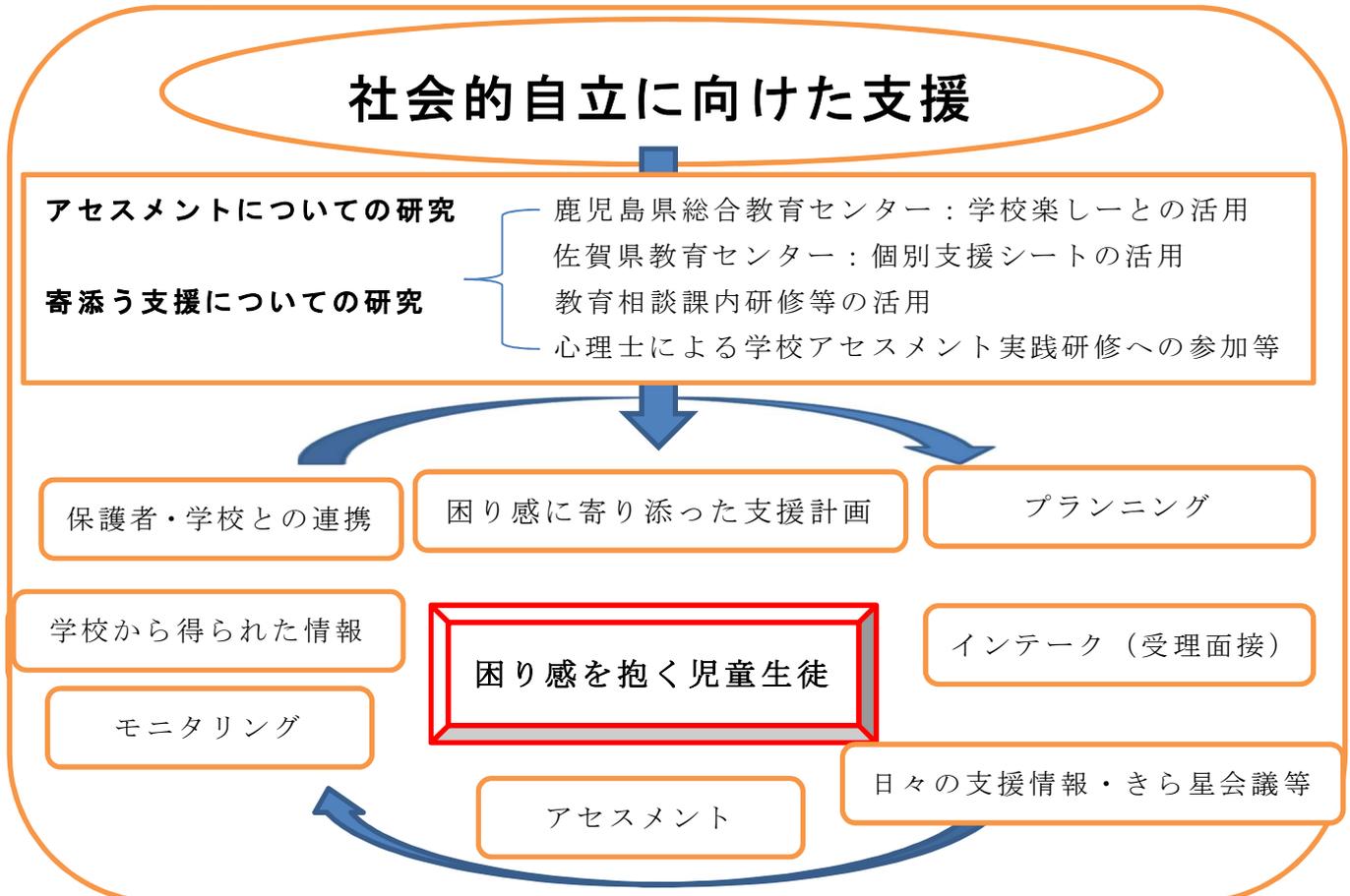
那覇市立識名小学校教諭 本村 良太

〈研究の概要〉

児童生徒がどのような困り感を抱え、どのようなニーズを抱き本学級へと繋がったかたを本人、保護者、学校等関係機関との連携を基に把握し、心理士や指導主事、担当支援員等との情報交換から適切なアセスメントを持ち児童生徒の困り感に寄り添った支援をすることを通して、社会的自立に向けての効果的な支援の工夫を持った。

支援では、アセスメントを基に自己肯定感の向上や達成感を持つことを目指し調理体験や農業体験、スポーツ体験等体験活動を中心に支援を行い「できる」「できた」「もっとやってみたい」等成功体験を積ませることに視点をおいて実践に取り組んだ。これらの体験や周りの大人との関わり等を通して、困り感を抱く児童生徒が自信や自己肯定感を向上させ、社会的自立への一歩を踏み出すことができた。

〈研究のイメージ〉



目 次

I	テーマ設定の理由	71
II	研究目標	72
III	研究構図	72
IV	研究内容	73
	1 アセスメントについて	
	(1) アセスメントとは	
	(2) アセスメントのポイント	
	2 鹿児島県総合教育センター：学校楽しーとの活用について	
	佐賀県教育センター：個別支援シートの活用について	
	3 きら星学級での鹿児島学校楽しーとを活用した支援について	
V	研究実践	76
	1 アセスメント	
	(学校生活, 家庭生活, 対人関係, 本人の特性等についての情報収集)	
	(1) 学校調整	
	(2) 学校支援計画の活用	
	(3) インテーク（受理面接）の実施	
	(4) 支援目標の設定	
	(5) きら星会議	
	(6) プチきら星会議	
	(7) アフター支援	
	2 アセスメント研修より	
	ケース 小学生女子（心因性不登校：自閉症スペクトラム）	
VI	実践を通しての考察	79
VII	成果と課題	80
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献・引用文献》

不適応（不登校）児童生徒の社会的自立を目指した支援の在り方

～児童生徒の困り感に寄り添ったアセスメントの工夫を通して～

那覇市立識名小学校教諭 本村 良太

I テーマ設定の理由

文部科学省は2019年10月25日新たな不登校に対する取り組みをまとめた「不登校児童生徒への支援の在り方について」において、不登校児童生徒への支援は「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意することとの通知を出した。これにより、これまでの過去4回の通知はすべて廃止され、「学校復帰に捉われない」という新しい不登校対応を明確にした。

学校や教育委員会においては、不登校児童生徒が主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、不登校のきっかけや継続理由に応じて、適切な支援や働きかけを行う必要があることについても触れ、学校や教育委員会等の取り組みの充実として、児童生徒の学習状況等に応じた指導・配慮をすること。教員だけでなくスクールカウンセラー（以下SC）やスクールソーシャルワーカー（以下SSW）等と連携協力し、組織的な支援体制を整えること。個々の状況に応じて、教育支援センターや不登校特例校、フリースクール等の民間施設、ICTを活用した学習支援等多様な教育機会を確保すること等を挙げている。

また、不登校児童生徒支援と合わせて、不登校に関する知識や理解などを学ぶ研修等の体系化とプログラムの一層の充実を図り教員の資質向上を図ること。教育支援センターの整備充実を進め、教育支援センターを中核とした不登校児童生徒やその保護者を支援するネットワークを構築すること。訪問型支援等保護者への支援の充実を図るほか、日頃から民間施設とも積極的に情報交換や連携に努めること等を挙げている。

社会的自立とは、もともと障がい者や精神疾患の患者達など何らかのハンディキャップを負った人達の「自立」を表現する際に用いられることが多く、具体的なハンディキャップと関連させずに広く青少年全般に用いられることは一般的ではなかった。しかし「不登校」や「引きこもり」等についても用いられるようになる過程を経て、近年になって青少年全般について「社会的自立」と論じるという用いられ方が見られるようになってきた。

子ども期における「社会的自立」は学習指導要領で重要視されている「生きる力」と近似したものだと考えられ、知・徳・体の調和のとれた状態で、個性を持ち主体的に社会と関わっていくことが「社会的自立」の姿だと言い換えることができる。（青少年育成施策大綱より）

教育相談課きら星学級においては、「遊び・非行傾向の不登校や長期欠席等による不登校の児童生徒への日中の居場所を確保し学校や社会への適応の促進」及び「将来の社会的自立に向けた支援を行っている」その中で、学業不振やいじめ、家庭内の問題等で困り感を抱え不登校状態となっている児童生徒は国の調査同様本市でも年々増加傾向にある。

支援の前にインタビュー（受理面接）を行い児童生徒の状況を把握し、学校や関係機関、

心理士等と情報共有を図り「困り感に寄り添い・耳を傾ける・児童生徒に合わせた支援」を心掛けながら支援にあたっている。

これまで学級担任，生徒指導主事として児童生徒と接する中で学校に通えない，教室に入りたくても入れない児童生徒を多く目の当たりにしてきた。その対応として「何とか学校に来てもらえるようにしたい」という気持ちや焦りから児童生徒の困り感に寄り添った声掛けや支援，保護者対応が行えていたか疑問が多く残る。

そこで本研究では，児童生徒の困り感に寄り添った支援としてアセスメント（見立て）の方法として，鹿児島県総合教育センターにおいて作成された学校楽しーと（以下，学校楽しーと）と佐賀県教育センターにおいて作成された個別支援シート（以下，個別支援シート）の2つのシートの活用やインテーク（受理面接）や学校等から得られた情報，さらには日々の支援情報を基にしたアセスメントを基に，効果的なプランニングを行い児童生徒の困り感に寄り添った支援計画を立てその成果と課題を分析し，学校と連携しながら支援にあたることで，児童生徒の将来の社会的自立に向けた支援へと繋げることができる考え，本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

不適応（不登校）児童生徒の社会的自立に向けて，日々の支援等から得られた情報を基にアセスメントを行い，困り感に寄り添った支援について実践研究する。

Ⅲ 研究構想図

【本研究でめざす子ども像】

社会的に自立できる児童生徒の育成

【研究テーマ】

不適応（不登校）児童生徒の社会的自立を目指した支援の在り方
～児童生徒の困り感に寄り添うアセスメントの工夫を通して～

【研究目標】

不適応（不登校）児童生徒の社会的自立に向けて，日々の支援等から得られた情報を基にアセスメントを行い，困り感に寄り添った支援について実践研究する。

【研究方法】

- 1 日々の支援情報を基にアセスメントを行い，効果的な支援へと繋ぐ。
- 2 アセスメントシートを活用した支援の工夫を行う。
- 3 鹿児島学校楽しーと・佐賀個別支援シートの活用。
- 4 課内心理士との連携を通してアセスメントをもとに助言を得ながら効果的な支援へと繋ぐ。

【国・県・市の課題】【児童生徒の実態・願い（目標）】【保護者の願い】【学校（教師の願い）】

IV 研究内容

1 アセスメントについて

(1) アセスメントとは

アセスメントとは、「対象者に対して、適切な関わり（支援）を行うために、対象者から得られた情報のもつ意味について考えること」と定義され、「見立て」などと表現することもある。アセスメントと支援の関係について図式化すると、下記のように説明できる。

- ① 目の前の対象者の言動・現状などの情報に対し、
- ② すでに持っている対象者の情報を参照し、
- ③ ①を引き起こしている/そうさせている対象者とその環境の問題をアセスメントし、
- ④ 支援の焦点を定め、支援を行う（関わりを行う）

(2) アセスメントのポイント

「人間は環境の生き物である」などと言われる通り、目の前の対象者の置かれている状況、行動の背景を深く探るには、対象者が影響を受けているであろう身の回りの人、集団、組織、社会などの環境、そして、その人の身に起こった過去の出来事に目を向けてみることも大切になる。逆に言うと、目の前の対象者の言動や現状、過去の出来事等に視野を広げる（仮説を検証する）ことで、支援（関わり）の手数も増やすことができる。

そのため、アセスメントは児童生徒にどのような指導・援助をするのか（しないのか）を決定するために必要な情報を収集・共有・判断・検証するプロセスと言える。様々な情報を共有し合いながら「今はこういう状況なのかもしれない」「この関わり方が有効かもしれない」と仮説を立て、実際の対応によってその仮説を検証、修正していくことが大切である。

2 鹿児島学校楽しーと・佐賀個別支援シートの活用について

これまでも学校においてアセスメントシートは活用されてきた。これまでのアセスメントシートでは①家族構成や本人の状況（前学年までの出席状況等）の把握②学習面や生活面の状況把握③これまでの指導・支援の経過等④関係機関との連携や短期支援計画等の内容等は記載はできるが、これはあくまでも作成した教師のアセスメント（見立て）であり、本人が何に困り感を抱いているかのアセスメント（見立て）が上手く出来ていない状況がある。また、学校現場においてその活用についても、管理者、担任、関係職員間での情報交換という形での活用が主になっており、R-PDCA サイクルに基づいた長期的な支援策の構築には至っていないのではないかと考える。

そこで、今回2つのアセスメントシートを活用し在籍校である識名小学校の先生方の協力を得ながら、年3回のR-PDCA サイクルに基づいた支援を構築していきたいと考える。

1つ目のシートは「鹿児島学校楽しーと」であり、このシートは28の質問に答えることで6観点（友達との関係、教師との関係、学習意欲、自己肯定感、心身の状態、学級集団における適応感）といじめに関する項目が6角形のグラフとして表示（視覚化）され、このグラフからクラス全体の状況や一人ひとりの状況を把握することができる。

2つ目のシートは「佐賀個別支援シート」であり、学校楽しーとから落ち込みが大きな児童をクラスから2～3人抽出し、49の質問に対し「はい・いいえ」のどちらかを教師が選択して個別の見立てを行うものである。この見立てをもとに学校や家庭、地域での支援

者や支援方法を計画し2週間から1か月・2か月という短期計画を立て支援を行い支援後に再度教師の側で49の質問に答え児童生徒の変容を見取り、これを年3回行う事でR-PDCAサイクルに基づいた支援へと繋げ次年度引継ぎ資料として活用していきたい。

また、この2つのシートは単に困り感を抱いている児童生徒把握という活用ではなく、R-PDCAサイクルに基づいてクラスの状態や教師との関係性等を確認することで年々増加傾向にある不登校問題における新規の不登校児童生徒を生まないための手立てともなると考える。

さらに、2つのシートを活用しアセスメントすることで教師の側の声掛けや指導の振り返りともなり、教師力の向上（例 声掛け、指導の在り方、児童生徒理解など）にも繋がると考える。

学校楽しーとから困り感の大きい児童生徒を抽出し佐賀個別支援シートを活用して支援策を構築するとあるが、佐賀シートの特長として支援策の具体例がタブに10項目程度あるので年齢や経験年数等に関わらずどんな先生方でも支援策をある程度構築できる良さがある。2つのシートをもとに学年会や校内生徒指導委員等において、SCやSSW、養護教諭、相談員等からアドバイスや情報を頂きながら支援計画を立て（見直しもする）支援を行いたい。また、必要であれば外部機関（教育相談課）等と連携し必要なアドバイスを得ながら支援策を見直す。必要であればきら星学級やあけもどろ学級等外部機関へ繋ぎ支援を行えるよう取り組みたい。

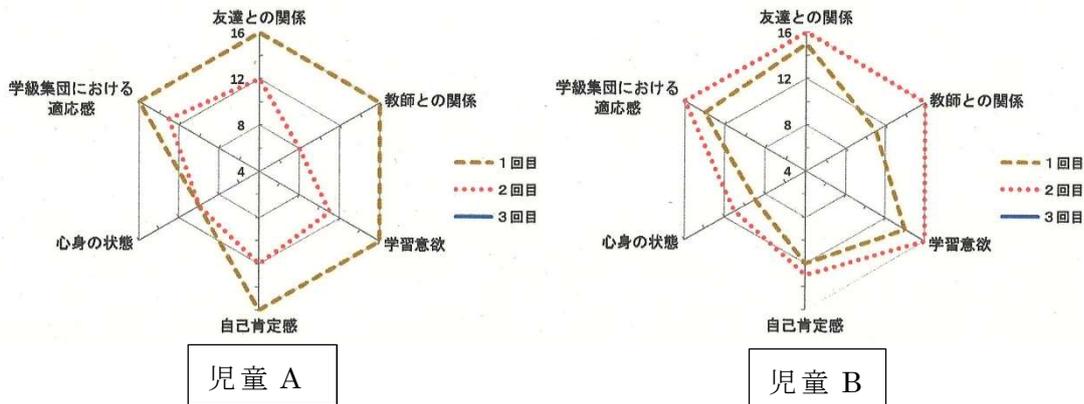
3 きら星での学校楽しーとを活用した支援について

きら星学級に通級または支援を必要とする児童生徒はすでに何かしらの大きな困り感を抱いている。通級や支援の前にインテーク（受理面接）を行い家庭や学校の情報等から心理士がアセスメントし支援の在り方を支援員へ伝達する。しかし、この見立てについても本当に本人の困り感にポイントを絞ったものになっているかという点でぼやけた感が拭えない。その理由として、インテークの際に保護者と同伴で面接に来ることの出来ない児童生徒や面接に参加してもコミュニケーションが苦手で自分の思いや考えを上手く伝えられない児童生徒が少なからずおり、保護者の困り感や要望は聞き取れるが、なかなか本人の困り感等は聞き取れないという現状がある。

そこで、支援開始から2週間（または1か月）経過したのち支援員との間である程度関係性を構築できた場面できら星担任からきら星用に作成した「鹿児島学校楽しーと（きら星アンケート）」を実施し本人の困り感を把握し、それをもとにきら星会議やカンファレンスにおいて支援員や心理士と支援プランを練りその後の支援へと活用したい。そうすることで、より具体的な支援策が構築でき児童生徒の困り感に寄り添った支援へと繋げることができると考える。また、教師同様、支援員の側も自分自身の支援の振り返りをするにも繋がり、その後のより良い支援策構築にも繋がると考える。

きら星アンケートについては、3か月の支援期間中に最低でも2回取り（できれば3回取りたい）児童生徒の変容や課題を学校提出資料と一緒に提出しその後の学校での支援プラン作成の一助としたい。

鹿児島学校楽しーと（識名小アンケート）より抜粋



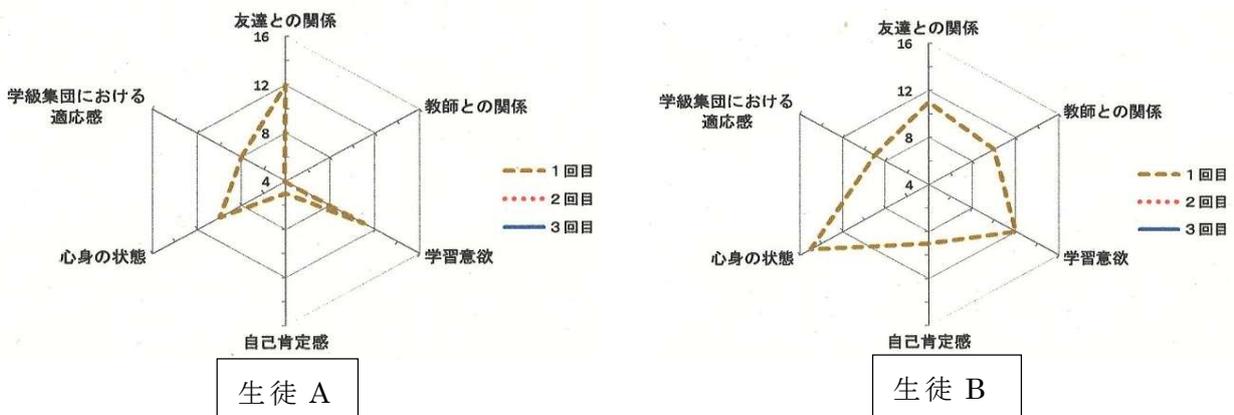
・アンケートは7月と12月に行っている。この間の学級での子ども達の変化や教師、家庭での関わり等でグラフに大きな変化をもたらしているのが見て取れる。特に児童 A はグラフが内側により観点別の得点が減っているのが分かる。3回目のアンケート（2月末か3月初旬）に向けてどのような手立てを構築するかを佐賀シートの支援一覧を参考に、また関係職員と連携して取り組みよりよい支援策を練っていききたい。

佐賀個別支援シートより抜粋

子どもの状態像から期待する子どもの姿（目標）を考えてみましょう。	目標1 学校で友達と仲良く過ごしたい。	目標2 勉強を頑張りたい。	目標3 ここを子どもの目標として記載したい。
<p>チェックリストで作成された子どものプロフィールを基に、支援案を作成します。支援の必要性が高いタイプを決定し、支援案を選びましょう。</p>	<p>自己コントロールが低いタイプ 支援案一覧</p> <p>① 自分の行動について一緒に振り返る。(個別に)</p> <p>② ルールや勉強を定める。(人を見せたり、ものを取られたり、教室を出る上に行き先を言うなど)</p> <p>③ 信頼しやすい環境(行事での役割の場、学級での役割など)を準備し達成感を味わわせる。</p> <p>④ 言葉かけのときは、穏やかな口調、短い言葉、低い声量などで行う。</p> <p>⑤ 日常生活や授業で起きた出来事ややり取りを振り返る。(実践したとき、ルールが守られなかったときなど)</p>	<p>1. 支援の必要性の高いタイプを選択する。</p> <p>2. ①の空白をクリックし、支援案を選択する。</p> <p>3. 上の手順で②～⑤を必要に応じて選択する。(1つでも2つでも構いません)</p> <p>※②～⑤を選択する際に、別のタイプで支援案を選択してもいいです。</p>	
<p>活動に参加しないタイプ 支援案一覧</p> <p>① 座席の位置を工夫する。(教師がかかりやすい場所など)</p> <p>② 支持的風土のある学級作りをする。(グループエンカウンターなど)</p> <p>③ 特別な場で個別学習を行う。(補充学習など)</p> <p>④ 学習内容に見直しを持たせる。(手順や内容、始末や終わりの時間など)</p> <p>⑤ かわりやすい人との関係作りをする。(養護教諭・SCなど)</p>		<p>集団を避けるタイプ 支援案一覧</p> <p>① その子なりの参加の仕方工夫する。(一人でできる活動の準備など)</p> <p>② 話し合っって一日の過ごし方を決める。</p> <p>③ できることを一つずつ増やしていく。(参加できる時間や場の選択など)</p> <p>④ できることを見つけ、活躍の場を与える。</p> <p>⑤ 支持的風土のある学級作りをする。(グループエンカウンターなど)</p>	
<p>学習上のつまずきがあるタイプ 支援案一覧</p> <p>① 課題の量や内容に合わせた時間を調べる。(量を抑える、時間を区切るなど)</p> <p>② 課題の量や内容を調べる。(内容を調整できるようにするなど)</p> <p>③ 座席の位置を工夫する。(教師がかかりやすい場所、モデルにのり子の数など)</p> <p>④ 特別な場で個別指導を行う。(補充学習、特別支援学級、指導員教室など)</p> <p>⑤ 標準の量や内容を調べる。(ひらがな・九九表・ワークシートなど)</p>	<p>孤立するタイプ 支援案一覧</p> <p>① かわりやすい人との関係作りをする。(養護教諭・SCなど)</p> <p>② 集団から離れるときや入るときに職員との連携をする。</p> <p>③ グループを工夫する。(かわりやすい子など)</p> <p>④ 子ども同士の場面に後援も加わる。(グループ学習、休み時間、給食時間など)</p> <p>⑤ 役割演技を通して、人とつながる学習をする。(ロールプレイなど)</p>	<p>学校で話さないタイプ 支援案一覧</p> <p>① 「話す」という以外の方法で表現してもらいたいことを伝える。(絵・カード・絵・音響など)</p> <p>② 話すことを強要しない。</p> <p>③ 教師との信頼関係を築く。(受容的態度・好きな遊びや活動など)</p> <p>④ 座席の工夫をする。(かわりやすい友だちの近くに)</p> <p>⑤ 「話す」「聞く」の環境・関係作りをする。</p>	
<p>※タイプ別の①～⑤が重複しないように注意してください。重複してしまうと支援計画シートを作成する際に不具合が生じます。</p>			<p>情報収集シート</p> <p>支援計画シート</p> <p>個別支援シート (印刷用)</p>

学校楽しーとから得たデータを基に2～3名の児童へ個別支援プランを立て支援することでよりよい支援へと繋げる。

鹿児島学校楽しーと（きら星学級アンケート）より抜粋



・それぞれ10月、12月にきら星にて行ったアンケート結果である。生徒 A、生徒 B に共通する事としては「教師との関係」「自己肯定感」の項目が低くなっている。支援を行うに当

たって自己肯定感を育む支援計画を心理士等から助言を頂く，担当支援員と担任とでプチきら星会議を持つ等して支援に当たった。また，学校との情報交換も多く持ち，一人ひとりのニーズや困り感を共有しながら支援に当たった。

V 研究実践

1 アセスメント

(学校生活，家庭生活，対人関係，本人の特性等についての情報収集)

(1) 学校調整

学校側からは管理職，生徒指導主事，担任又は学年主任，養護教諭等，当該児童生徒と関わりのある職員，きら星学級からは担当指導主事，担任，担当支援員が参加して行う。

内容として，現在の児童生徒の様子や家庭の状況，学級や学校での様子，生育歴や現在の状況に対するこれまでの学校の対応等を確認する。その上で今後，きら星学級においてどのような支援が必要かを話し合い，学校，きら星学級で共通理解を図り，足並みを揃えたうえで3ヶ月の支援をスタートする。

(2) 学校支援計画の活用

学校調整の際に学校側から提出してもらった資料であり，学校の目標（長期目標・短期目標），担任，保護者そして児童生徒本人の願いを記入して頂いている。この中には学習や行動面，対人関係，生活面における良さや改善点，具体的な支援体制も記入されている。これらを基にして本人の得意なことや課題を把握し，本人の困り感に合わせたきら星学級でできる支援プランを話し合いより効果的な支援が行えるよう取り組んでいる。

(3) インテーク（受理面接）の実施

支援をスタートするに当たって保護者（場合によっては本人参加）と心理士がインテークを行い現在の状態（家庭での様子や心身の状態等），不登校のきっかけや思い当たる原因，生育歴，交友関係や学校での様子，本人の得手不得手なこと，本人，保護者のニーズ等の聞き取りを行う。その際，学校の情報とは異なる情報も多数出て来るので，インテークによる情報をしっかりと把握し，本人や保護者のニーズに沿った支援プランを心理士と再度話し合い，学校から得られた情報とインテークにより得られた情報を基に本人の困り感に寄り添った支援が行えるよう取り組んでいる。

(4) 支援目標の設定

支援開始後数回の支援を経たのち，担当支援員が児童生徒と関わる中で聞き取った内容や見立てなどから得られた本人の困り感をもとに，担当指導主事や担任，心理士，担当支援員がどのような支援を持つか話し合い，本人の状況に合わせた支援目標を設定し支援に当たる。支援目標については，支援が経過するごとに少しずつ変更を加え，本人の状況に合わせて修正を行っている。また，支援目標がずれている場合もあるのでその都度修正しながらより良い支援目標を設定できるよう取り組んでいる。

(5) きら星会議

週1回定期的にきら星会議を持ちそれぞれの支援状況報告を行っている。その中で，現在の児童生徒の状況（ニーズや困り感等）を担当支援員から伝達してもらい，担当指導主事や心理士からのアドバイスを参考に再度見立て直しをすることで，より効果的な支援について考察し，これまでの支援の成果と課題を分析することができた。

(6) プチきら星会議

担当支援員が支援中聞き取った内容や観察等から児童生徒が抱く困り感等（家庭や学校での困り感，問題行動，友人関係，進路指導等）を不定期に担当指導主事や担任，心理士と情報交換を持ち，その際に得られた情報を基に支援プランを見直す。また，学校と連携を持ち再度学校調整を行ったり，あけもどろ学級やていんぼう教室等他の機関との連携を持ちながら支援する等，児童生徒の困り感に寄り添った支援を行うことができた。

(7) アフター支援

今年度も昨年同様通級期間（3ヶ月）が終結しても，気になる児童生徒に関してはアフター支援という形で月1回や週1回等児童性に合わせて活動する場を設けた。アフター支援の中で現在の困り感（家庭や学校生活，進路指導等）や頑張っていること，楽しい事等を担当支援員が聞き取り，それらをきら星会議で伝達し担当指導主事や心理士からのアドバイスを参考に支援に当たり，場合によっては学校や保護者へ情報共有することができた。

また，集団での活動に興味を示す児童生徒に対しては，あけもどろ学級と連携し小集団活動として読谷の畑で落花生やジャガイモ収穫体験等を実施し小集団活動・農業体験にも取り組むことができた。さらに，「きら星ビーチクリーン作戦」としてビーチクリーンや小集団でのボール運動等を行い，苦手とする小集団に関わる場面作りにも取り組むことができた。

【アセスメント研修より】

5月13日 課内研修・・きら星支援の際の視点について：対象生徒（中3女子）

- ・初めから話す等の関りを持つことが苦手な児童生徒へは無理に関わろうとせず，長い目で見ると見る。
- ・本人が自分を中心に活動できる場面を工夫して持つことで関係性を構築する。
- ・受検や体験活動など自分の将来と関わらせる支援を持つことで，自立へと繋げる。
(自信を持たせる)

・本人が少しでも安心できる場所の1つとしてきら星での支援が行えると良い。

- ・ 8月21日 安岡中学校・・教育相談担当より不登校生徒及び適応教室運営について
- ・ 9月11日（金）寄宮中アセスメント事前研修・15日（火）寄宮中アセスメント研修
- ・ 9月14日（月）真和志小アセスメント事前研修・16日（水）真和志小アセスメント研修
- ・ 10月12日（月）識名小アセスメント事前研修・26日（月）識名小アセスメント研修
- ・ 12月7日（月）与儀小学校アセスメント研修
- ・ 1月15日（金）上間小学校アセスメント研修

10月26日（月）識名小アセスメント研修（校内研修会：架空事例小4男子（登校渋り）より

学校はチームで協力体制をつくっていくことか
大切だと改めて思いました。
担任もスクールカウンセラー等も活用し、聞いて
もらうのがいいと感じました。

子供の背景にある問題と、起きている問題を意味
づけし「仮説を立てる」というのが、大切なことだと
分かっていけるのが、難しく、適切にアセスメントしていく
ことに対して不安になりました。

教育相談（適応指導教室の役目）とは、生徒が居心地が良い、安心、安全だと思う場所を作ること。 **安心・安全とは**

① 「行きたくない」「行けなかった」と言える。

「行きたくない」→「行きたいけど、何とかしたい・・・」と思っている。

「行けなかった」→「行けなかったが、このままじゃいけない、自分は変わらなければならない」と思っている。

② 誰も不思議な顔、悲しげな顔をしない。

「また～？どこ行くの？授業受けなくて大丈夫？」という友達や担任・教科担任の不機嫌な顔がない。

③ 不利益が生じないこと。⇒ 学習ができる、出席が確保できる等

○生徒は、「学校へ行かなければならない」と思っている。でも行けない。(心理的逆転)

○生徒を支援するためには、保護者の協力なしではできない。(保護者との関係づくり)

メッセージでのやり取りを頻繁に行う。電話は緊張するし取れないこともあるが、メッセージは親のタイミングで返信可能で、やや教師に対してハードルが下がる。

○関わる大人を増やす。⇒ 「子どもが成長するとは変容すること」大人はそれをサポートする。だからこそ「関わる大人（教師）を増やすことが大切」

ケース 小学生女子（心因性不登校：自閉症スペクトラム）

【アセスメント：学校、保護者からの情報収集】

- ・登校しても教室に入れなかったり、徘徊や校外への飛び出しがあった。
- ・保護者相談を重ね今年度は保護者付き添いで週3回の登校。給食後下校する事が多い。
- ・保護者は別室待機し、学級での活動等で疲れた際やトラブルがあった際に別室で対応。
- ・本児は学校へ行きたくないわけではないが、クラスメイトとトラブルになることが多く本児もどうしていいかわからない様子が伺える。
- ・担任としても、本児も大切であるが周りの児童が我慢している様子も見られるのでみんなに申し訳ない気持ちである。

【モニタリング】

- ・急な予定変更への対応が苦手であり、マイクの音が気になるという面も見られる。
- ⇒ 本児は家のテレビ音量やスーパーのレジの音も気になるとのこと。
- ⇒ 学校の集会においてもマイクの音が気になりボールをついたりした。
- ・本児はアイデア豊富で遊びやものづくり等に意欲的に取り組むことができる。また、見通しをもって活動することで時間を気にして行動でき、痙攣を起こすことが少なくなる。

【プランニング】

- ・人と関わりたいという気持ちが強いが上手く関われず困り感を抱いている。支援員と1対1での関係性を築くことや学校内で関わる大人を増やし学級へ繋げたい。
- ・本児主体の活動では表情良く活動に参加することができる。そこで、本児の興味関心のある野菜作りやボール運動等で自信を持たせ自己肯定感を高めたい。
- ・学校支援でなく、通級支援に切り替え体験を通して自己肯定感を高め、それと並行して学校との連携を持ち学級や同学年の友人との関わりへとスモールステップで繋ぎたい。

- ・朝の学級でのメモに代えて、本人に1日の流れが分かるよう個別時間割を作成し本人が1日の活動を把握できるよう工夫する。その中にこの時間はどの先生が対応してくれる等することで本人の1日の活動の見通しや保護者の負担軽減に繋げたい。
- ・課題（国語・算数ドリル）は取り組んだ後に学校職員に確認してもらうことで職員との関わりを持つ工夫をする。⇒ 1冊のプリント集として足跡を残すことで自信に繋げる。
- ・本児は学校は「遊ぶところ」との発言がある。そこで、「折り紙をしたい」という場合は「何の授業にあてはまる？」と問いかけ、本児がやりたいことと授業とを結びつけるような声掛けで授業中の過ごし方について考えさせたい。

【児童の変容】

- ・休みの日は保護者と釣りやキャンプ等野外で思いきり活動することで気持ちを切り替えて学校生活を送ることができた。⇒ 保護者の関わりが本人の変容に大きく関わった。
- ・学校において校長，教頭，担任を中心に個別の時間割を作成し本人に見通しを持たせた支援を行うことで徘徊や飛び出し等が減った。
- ・本児の状態や引き継ぎ事項等を個別の支援記録簿として共有することで校内での支援体制が構築でき安定した校内支援に繋がった。
- ・気持ちが高ぶった際にクールダウンできる個室を確保したことで自分で気持ちをコントロールすることができるようになった。
- ・教室や相談室等本人の状況に応じて対応する場が増えたことで心の安定を保つことができ、苦手な学習にも少しずつ取り組むことができるようになった。
- ・1日のプラン通りに行動できるようになった。また、英語や理科の学習では学級に入り授業を受けることができるようになった。
- ・家や学校において以前のように癇癢を起こす場面も減り、担任との関係も少しずつ改善している。

IV 実践を通しての考察

本研究において重要視した点は如何にアセスメントにより児童生徒や保護者の困り感、ニーズに寄り添った支援をプランニングできるかであった。「学校に行かないのではなく、行きたくても行けない」という児童生徒の思いに寄り添うのと同様で、側で見ている保護者の思いや困り感に対しても共感的な理解の下、共に手を取り合いながら関わる姿勢を示し「一人じゃない」「みんなで繋がる・みんなで支える・みんなで関わる」という考えを基に関わったことが効果的な支援に繋がったと考える。

きら星学級に繋がる児童生徒は多くの場合、今年度に入ってから繋がるケースが多いが、中には教育相談課にて2，3年支援しきら星に繋がる。または、昨年度から繋がって今に至る児童生徒もいる。このような児童生徒は学校という本来ならば「安心・安全な居場所がそうでない場所」「息苦しさを感ずる場所」となっており、その原因として「友人関係」「教師との関係」「家庭環境」「本人の特性」「いじめ」等様々な原因で困り感を抱いている児童生徒である。

この1年間を通して学校において飲酒や喫煙等問題行動の多い生徒や人と関わることに苦手意識持つ児童生徒等多くの児童生徒と関わるることができた。そして、一人ひとりの困り感やニーズが違い、その困り感やニーズに寄り添った支援を構築するため保護者や学校、

そして心理士や指導主事,担当支援員との情報交換や面談等を繰り返しながら支援を行い,全員とまではいかないが登校復帰,学校や学級への不適應解消,週2,3回の登校継続を果たすことができるようになった児童生徒もいる。

このことから,困り感を抱く児童生徒への適切な手立てとして本人や保護者,学校職員との連携,教育相談課等関係機関との連携を通してアセスメントすることの重要性やアセスメントを基にした適切なプランニングの構築,そしてこれらをR-PDCAサイクルで検証し修正や見直しを行いながら長期的視点に立って支援することが必要であると考え。そして,今回アセスメントの一助として活用した学校楽しーとや個別支援シートの活用を通して学校現場においてより身近にアセスメントを基にした児童生徒の困り感に寄り添った支援の構築が必要であると考え。

きら星学級での活動を振り返ると,支援当初仏頂面で大人に対ししかめ面だった生徒や元気がなく塞ぎ込む様子が見られた児童生徒が多く,体験を通して笑顔が増え,そして多くの活動に意欲的に参加する。または,学校の先生や級友と楽しく活動する等大きな変容を遂げる姿を目の当たりにすることができた。この変容の裏にはもちろん本人の努力や内面の変化はあるが,その変容を促す土台となっているのは保護者や教師等周りの大人の関わりが大きいと考える。一教師として,そして一人の大人として今後も困り感を抱く児童生徒の手助けができるよう取り組んでいきたいと思う。

VI 成果と課題

1 成果

- (1) アセスメントの際に本人だけでなく保護者や学校職員等多くの方からの情報を基に困り感やニーズを把握することで効果的な支援を行うことに繋がり,登校復帰や将来の目標をもつ等,社会的自立への一歩を踏み出すことができた。
- (2) 困り感に寄り添った支援を行うことを通して児童生徒が本学級を「安心・安全な居場所」と捉え,支援員に対し「困り感」や「悩み」等を伝えることに繋がり,互いに信頼関係を基にした支援を実践することができた。また,登校復帰や適應指導教室への繋ぎ等,次のステージへの階段を登る事ができた。

2 課題

- (1) 本学級での支援終結後,本人の特性や家庭環境,学校との対応等が上手くいかず,再度不適應状態に戻ってしまう生徒がいた為,支援終結に向けた対応に課題がある。
- (2) 本学級へ繋がっても定期的な支援に参加できずに支援を終結した児童生徒を如何にして別の機関と繋ぎ,適切な支援を講じることができるかが課題である。

《主な参考文献・引用文献》

- ・不登校児童生徒への支援の在り方について・・・文部科学省 令和元年10月25日
- ・不登校児童生徒への支援について・・・文部科学省 令和2年2月4日
- ・生徒指導を理解する～『生徒指導提要』入門～
- ・青少年育成施策大綱
- ・アドラー心理学で変わる学級経営・・・赤坂真二 著 明治図書 2020年3月
- ・鹿児島県総合教育センター：学校楽しーとの活用
- ・佐賀県教育センター：佐賀個別支援シートの活用